

静嘉堂所蔵古写経群の伝来——明治時代の松浦武四郎ほか

浦木 賢治

はじめに

公益財団法人静嘉堂（以下、「静嘉堂」）には書庫と美術庫の二つの収蔵庫があり、その経緯は判然としないが、それぞれに古写経が保管されている。この古写経群には奈良時代に遡る経典も含まれ、折に触れて調査研究・展示公開をされてきた（註1）。

静嘉堂の約二十万冊の古典籍と約六五〇〇件の美術品のコレクションは、三菱第二代社長・岩崎彌之助（一八五一―一九〇八）、その嗣子で三菱第四代社長・岩崎小彌太（一八七九―一九四五）によつて蒐集された。そのコレクションの中で古写経が占める割合はほんの一部に過ぎないが、いくつか貴重な経典も含まれている。これらの古写経は明治時代以前にすでに流通していたか、明治期の廃仏毀釈により寺院等から流出したものが市場に流れたか、巡り巡って岩崎家が収蔵したものだろう。実際、錦絵研究などで知られた石井研堂（一八六五―一九四三）は、明治三十一年（一八九八）の読売新聞紙上で「明治維新後、諸寺院の荒廢の極に達しける時、天平時代の経巻を荒縄に束ねて紙屑屋に売り渡し、紙屑屋も其用途なく、之を寸裂して廢紙となしける程」（註2）と回想している。ただ後述するように明治十年代には伝統文化を再評価する機運が見受けられ、市井で古写経を展示する機会もあった。石井が記述したような社会情勢は西洋文化偏重の時期であった明治初期と思われるが、いずれにせよ古写経は紙屑以下の扱いを受けていた時期があったのである。

静嘉堂が所蔵する古写経群の概要は、増田晴美編著『百万塔陀羅尼の研究―静嘉堂文庫所蔵本を中心に』（汲古書院、二〇〇七年）、『東京大学史料編

纂所研究成果報告二〇二三―三、（公財）静嘉堂調査報告書 静嘉堂所蔵古写経群の調査と研究』（二〇二四年）（註3）で把握することができる。両書ともに静嘉堂が所蔵する古写経類を調査、検討・評価を加えており、両書によつて静嘉堂所蔵古写経群（以下、「静嘉堂古写経群」）の基本情報は網羅されているといえよう。しかし、紙数の限りもあり、これらの書籍でも静嘉堂の古写経群の伝来等について十分な解説を付すには至っていない。そこで本稿ではその点を補うことを目的に、これまで確認できた伝来に関する知見を記しておきたい。静嘉堂が所蔵する古写経は一見すると統一感のない古写経コレクションのように思えるが、旧蔵者・伝来という点で概観するとある一群を成していることがわかる。この視点は、静嘉堂古写経群に新たに付加できる歴史的価値であり、静嘉堂のコレクションの新たな側面を照らすものと考ええる。

一、岩崎家蒐集前——その一、永恩具経

まず「永恩具経」と呼ばれる古写経群の一部である「大般若波羅蜜多経卷第五二六」（以下、「静嘉堂本永恩具経」、口絵4）を取り上げたい。

永恩具経は、鎌倉時代、貞永天福年間（一二三二―三四）頃、興福寺の蔵司・永恩が天平写経の大般若経を集め、朱で句点を加え、巻末に「句切了永恩」と朱書きしたことから、その通称で呼ばれる。

「静嘉堂本永恩具経」は、現状、折本に仕立てられた一帖で、巻末識語「天平二年歲次庚午三月上旬始寫大般若経／一部六百卷 右京七條二坊黄君満侶寫奉」により、天平二年三月に黄君満侶によつて書写が始まったことがわか

る。永恩具経は各地に所蔵されており、奈良国立博物館は折本の巻第二〇五（識語は確認できず）を収蔵し、京都国立博物館が所蔵する巻第五二二は卷子装、静嘉堂本と同一筆者が同じ時期に書写したことが識語からわかり、同じく京都国立博物館が所蔵する巻第五一四も卷子装、天平二年に「右平群郷都菩臣足嶋」が書写している。京博本はいずれも重要文化財である。

「静嘉堂本永恩具経」に伴う箱蓋表には「大般若波羅蜜多経巻五百二十六天平二年写本／黄君満侶筆」、蓋裏には「此巻與和銅写経書体相似筆法適勤／有唐人風致焉／甲申七月大教正松翁儀」と墨書があり、明治十七年（一八八四）、「松翁」こと養鸕徹定（一八一四～九二）が書したことがわかる。

養鸕徹定は幕末から明治時代に活躍した浄土宗僧侶である。久留米藩士の第二子で、六歳の時、地元の西岸寺で剃髪すると、十代で京都や江戸を遊学した。天保五年（一八三四）、増上寺に入り、文久元年（一八六一）、武蔵国岩槻（現さいたま市）の浄国寺（関東十八檀林の一つ）の住持となる。明治五年（一八七二）には教部省に出仕し、同八年三月に大教正となり、浄土法規を改めたという。明治七年、知恩院第七十五世住持となり、同十六年（一八八三）に浅草幡随院も務め、同十八年に浄土宗管長となった。

養鸕は古写経を蒐集する一方、各地の貴重な古写経の題跋も記録収集していた。後にそれらをまとめた『古経題跋』（文久三年序、明治二年刊）を発刊し、現在、その書籍により江戸末期当時の古写経の伝存状況をうかがい知ることができ（註4）。

その『古経題跋』に「静嘉堂本永恩具経」に関する記述が認められる。養鸕は「河州高安蘭光寺」に所蔵された「大般若経巻第五百二十六」を採録し、その題跋として「天平二年歲次庚午三月上旬始寫大般若経一部六百卷右京七條二坊黄君満侶寫奉」を記録している。この大般若経こそ、巻数、巻末識語が一致することから、「静嘉堂本永恩具経」であることは間違いないだろう。

「河州高安蘭光寺」は河内国高安郡（現、大阪府八尾市）に所在する蘭光寺^{わんこうじ}のことで、和銅三年（七一〇）周防国の玉祖神社^{たまのそ}を勧請して創祀されたとされる玉祖神社（大阪府八尾市）の神宮寺で、承和三年（八三六）、僧・沓演慈濟によって建立されたという。鎌倉時代には將軍家の祈祷所となり、天平写経を

多く所蔵していたともいわれる。

幕末、養鸕が確認した時には、「静嘉堂本永恩具経」は蘭光寺に所在したわけだが、その後の流転も確認できる。後に述べるように、「北海道」の命名者で冒険家・好古家としても知られた松浦武四郎（一八一八～八八）が当経を所蔵していたことを彼の著作から確認できるのである。

また、彼と交友のあった人物たちの日記を紐解くと、当時、どのように古写経が受容されたか把握することができる。以下、武四郎と交友のあった松田雪柯（一八二三～八二）の日記に残された古写経の鑑賞記録などを確認してみたい。

武四郎と同郷の書家・松田雪柯の日記『松田雪柯東都日記』を紐解くと、交友のあった書家で官僚でもあった巖谷一六（一八三四～一九〇五）、明治大正時代に活躍した書家・日下部鳴鶴（一八三八～一九二二）らとともに武四郎の名前が散見される（註5）。松田雪柯の名は元修、字は公静、雪柯は号である。伊勢国一志久保町（現在の三重県伊勢市）の師職の家に生まれ、幼い頃より父から書法、漢学などを学んだという。三十一歳の頃、京都に上り貫名菰翁（一七七八～一八六三）に学び、書法・書画の鑑識について理解を深めた。その後、帰郷し、家塾で漢学と書法を指導。明治十一年（一八七八）、巖谷、日下部の招きに応じて東京へ移住し、明治十二年の正月頃から平河町の巖谷邸内に居住した。隣には日下部が住んでいたようだ。

雪柯の東京滞在中の日記『松田雪柯東都日記』には、武四郎や巖谷、日下部らはしばしば古写経を鑑賞し、情報交換を行っていたことが記録されている。例えば、明治十二年の記述を見ると

（明治十二年九月十四日条）

訪北海老人（武四郎のこと。引用者補足）、達中西弘繩所贈干瓢、借其所藏春初筆記・林氏雜纂・鍼盲録・遊毛摘勝・貞山利公年譜・尽忠録。老人又示近所獲光明皇后天平十二年所写経卷及木村二梅藏天平十五年所写経卷、真神品上々者、不勝欣賞。

(同年十月十七日条)

十七日 晴。(中略)帰路、訪北海老人、示新獲神護景雲古経、光明后経卷、聖教序及弘安辛櫃等。神護景雲経卷大字、足知運筆用墨之法矣。(傍線引用者。以下同じ)

という具合に「光明皇后天平十二年所写経卷」「天平十五年所写経卷」「神護景雲古経」などの古写経の名称を日記に確認することができる。永恩具経については、明治十三年九月十二日条に記載されている。

(明治十三年九月十二日条)

十二日 晴。午前、松浦老人来訪。示天平二年黄君満呂所写経卷、旧掖斎先生蔵。

この記録によれば、雪柯の居宅に武四郎が訪問し、武四郎が所蔵していた、「天平二年」に「黄君満」が書いた写経を見せたという。「旧掖斎先生蔵」という雪柯の記述から江戸時代後期の国学・漢学者、考証学者であった狩谷掖斎(一七七五～一八三五)が所蔵したものという。経名は書かれていないが、「天平二年」「黄君満」という記録から、この時、武四郎が持参したのは永恩具経と考えられる。

「天平二年」に「黄君満」が書写した経という点では、「静嘉堂本永恩具経」と一致するが、先の養鷗が記録した静嘉堂本の伝来情報、掖斎旧蔵という雪柯の記述、「京博本永恩具経 巻第五二二」も「天平二年」に「黄君満」が書写したものであることを勘案すると、この時、武四郎が持参した永恩具経が静嘉堂本と即断することには慎重になるべきだろう。いずれにせよ、ここでは、明治十年代には雪柯や武四郎周辺で古写経を見せ合い、鑑賞する文化が醸成されていたことを確認しておきたい。

二、岩崎家蒐集前—その二、松浦武四郎旧蔵古写経群

松浦武四郎は幕末明治を生き、明治時代に入ると好古家として古器物等を収集し、一大コレクションを築いた人物である。考古遺物、宗教遺物、勾玉などのコレクションが知られ、静嘉堂にも一〇四件の武四郎旧蔵品が収蔵されている(図1)註6。

これまで言及されていなかったが、武四郎は静嘉堂古写経群の幾つかの経の旧蔵者である。武四郎旧蔵の古器物とともに岩崎家が引き取ったのだろう。武四郎旧蔵の古写経は、武四郎自身の著作、例えば『撥雲余興』二編(首巻は明治十年、第二集は同十五年に刊行)といった書籍と松浦武四郎記念館が所蔵する「蔵品目録」から、大要を知ることができる(「蔵品目録」は武四郎の生家に伝来した資料だが、成立年代は不詳)。また武四郎が旧蔵した古器物の箱書のように、古写経が納められた箱の墨書が武四郎の知人・友人によるものである場合、武四郎旧蔵品であることの傍証となる。武四郎は所有した古器物の箱書を好古的趣味を持っていた知人・友人に依頼しており、古写経の箱にも同様の人物の箱書を認めることができるのである。そのような観点から静嘉堂古写経群から武四郎旧蔵品と思われるものをリストにまとめたのが表1である。

次に、管見の限り確認できた古写経を掲載した武四郎著作を参照し、適宜「蔵品目録」や箱書の情報も補足しつつ、武四郎旧蔵古写経を紹介したい。武四郎が刊行した著作は発行年が明らかであり、それは当該古写経の所有時期等を示している点も考慮しておきたい。

—隅寺心経—

明治九年(一八七六)、武四郎は神田五軒町に自宅を新築すると、その記念に蒐集古物の展覧会を開き、その記録として『馬角斎茶余』(明治九年刊)を出版した。そこには書家・市川万庵(一八三八～一九〇七)が題字を、儒学者・大槻磐溪(一八〇一～七八)、鷲津毅堂(一八二五～八二)が序を寄せ、渡辺小華(一八三五～八七)が挿図を描いた。その「第二席」には、「応仁二年

三月」の「大伝法院」(根来寺のこと)の銘を持つ経机が置かれ、その上に硯・墨・墨床・筆・刀子・筆架・水滴・卷子が置かれたようだ。筆と刀子は正倉院御物を模したもので、一緒に並べられた卷子が「巻 隅寺心経」(『馬角斎茶余』より引用)であった。

「隅寺心経」とは隅寺(海龍王寺)に伝わった般若心経を指し、現在でもその通称で呼ばれる。海龍王寺は藤原不比等邸(後の法華寺)の東北隅に位置したことから、「隅寺(角寺)」、「隅院(角院)」と呼ばれ、現在でも奈良市法華寺町に所在している。天平七年(七三五)、帰国した僧玄昉が住したことでも知られる寺院である。

武四郎の「蔵品目録」には「一 隅寺心経 ヶ (一巻の意。以下同) / 一 全 奥書付 ヶ」と列記され、武四郎が「隅寺心経」を二巻所蔵していたことがわかる。現在、静嘉堂古写経群にも「隅寺心経」二巻を確認でき(図2、表1-3、4)、それぞれ武四郎と交友のあった人物の箱書を伴っており、この二巻の「隅寺心経」は武四郎旧蔵と考えて問題ないだろう。

武四郎が「蔵品目録」で「奥書」と書いたのは功德文のことと思われ、片方の「隅寺心経」(図2-2)にのみ三行の功德文が伴っており、その箱の蓋裏には巖谷一六による箱書「明治十三年庚辰涅槃日／松浦北海翁属題 一六居士修薫了」を確認できる。もう一方の「隅寺心経」の蓋裏には市川万庵が「癸酉秋九月万菴無観并題籤」と墨書しており、明治六年(一八七三)に書したことがわかる。市川万庵は武四郎がしばしば箱書を依頼した人物(武四郎旧蔵古器物を納めた箱にも彼の箱書が確認できる)であり、もしかすると、この明治六年の箱書を有する「隅寺心経」を武四郎は早くに所有していたのかもしれない。これが『馬角斎茶余』の折に展示された可能性もあろう。

― 讃岐切 ―

次に取り上げたいのは「讃岐切」とも呼ばれる「金光明最勝王経」(図3、以下、「静嘉堂本讃岐切」)である。本経は一行三十四字の細字で書写している点に特徴がある平安古経で、菅原道真が讃岐に赴任している折に書写したという伝承が明治時代にも知られ(註7)、その通称で呼ばれる。「静嘉堂本讃岐切」は巻首「序品第一」から始まり、途中およそ二十紙分の欠落があり、「大吉祥天女品第十六」から「附属品第三十一」を書いた一巻である。軸附紙には寛文二年(一六六二)、「北野寺務二品親王」こと後水尾上皇猶子・良尚入道親王(一六二一〜九三三)の書付が残る(註8)。その箱書には永井盤谷(一八二〇〜八四)による墨書「明治六年九月中浣 大江喜暉薫手拝観并題籤」が確認できる。また、武四郎の「蔵品目録」には「一 讃岐切経巻／菅公之真筆一巻」と記されている。この「讃岐切」を掲載しているのが、武四郎の著作である『撥雲余興』首巻(明治十年刊行)である(図4)。

『撥雲余興』首巻は武四郎が所蔵した古器物を多数収録した著作で、掲載された古器物の内、三十件以上が静嘉堂に伝存している。武四郎の古物蒐集を示す好資料といえる図録である。その挿図は画家では河鍋晩斎(一八三一〜八九)、渡辺小華、田崎草雲(一八一五〜九八)、その他に幕府の大工棟梁を務めた経験を持つ好古家・柏木貨一郎(一八四一〜九八)、鍔金家・秦蔵六(一八二三〜九〇)らが描いている。挿図を描いた人物から明治期の武四郎の交友関係をうかがえる。その挿図の傍らには収集談や考証を記載している。

『撥雲余興』首巻には「金光明最勝王経」の「序品第一」の冒頭四行と軸附紙に記された良尚入道親王の書付を挿図として掲載している。これらの挿図から「静嘉堂本讃岐切」を描いていることは間違いない。

明治十二年に刊行された『尚古杜多』にも武四郎が描いた「讃岐切」挿図が掲載されており、そこには「讃岐経一巻七百／五十二行／琅玕勾玉七顆／松浦武四郎図」というキャプションとともに、柱に掛かった勾玉を連ねた首飾り、机上に開かれた卷子が描かれている(図5)。卷子は巻緒を解かれ、見返しが開き、本紙には点々が打たれる。この点は経文を表現しているのだろう。描かれた卷子は『撥雲余興』首巻にも掲載された「静嘉堂本讃岐切」なのだろう。武四郎が描いたこの挿図は、明治時代に古写経がどのように鑑賞されていたかを示しており、貴重な記録といえる。なお『尚古杜多』に記された讃岐切の行数「七百五十二行」は現状の「静嘉堂本讃岐切」(七三八行)より多く、静嘉堂本が切断されたことが推測される。実際、武四郎の旧蔵品には「讃岐切」の断簡(松浦武四郎記念館蔵)が含まれており、武四郎周辺で当経が切断され

たことを、明治前期の古写経受容の例として想定しておきたい。

―『撥雲余興』二集と永恩具経、増忒阿鈴経、鞆婆沙―

続けて『撥雲余興』二集を確認したい。本書は明治十五年に刊行された図録で、『撥雲余興』首巻と編集方針は同じである。この本には先述の「静嘉堂本永恩具経（口絵4）のほか、「増忒阿鈴経 巻第二十二」（図6）、「鞆婆沙 巻第六」（図7）の三種の古写経が掲載され、それらは、現在、静嘉堂が所蔵している。

「静嘉堂本永恩具経」は幕末、河内国の蘭光寺に所蔵されていたことを先に述べた。それが後に松浦武四郎の元に渡り、明治十五年刊行の『撥雲余興』二集に掲載された。そこには「大般若経天平二年写経」と書かれ、巻首および巻尾五行を挿図として載せている（図8）。その挿図と原品（口絵4）を比較すると、経文は当然のことながら、虫損の形、位置まで一致しており、武四郎が「静嘉堂本永恩具経」を所蔵していたことは間違いない。むしろ挿図に描かれていない虫損を原品に認めることができる（巻首初行「三蔵法師」の箇所など）ため、このような虫損は『撥雲余興』が刊行された後の食害ということになる。なお武四郎の「蔵品目録」には「一 大般若経巻 天平二年 ヱ」と書かれており、この記述が当経に該当するものと思われる。

『撥雲余興』二集に掲載されている「増忒阿鈴経」は、尾題下に朱印「善光」が捺されていることから「善光朱印経」とも呼ばれる奈良時代後期を代表する一切経である。「善光」は法華寺寺主の善光尼と考えられている。巻尾には校経列位が記され、天平宝字二年三月二十七日に校訂作業である勘経・対読を薬師寺僧・善牢らが担い、翌三年十一月四日に本経を三嶋県主岡麻呂が書写したことがわかる。その他、三名の校生、装潢師の名も墨書されている。

『撥雲余興』二集挿図には「増忒阿鈴経 巻第二十二」巻首の三行と巻尾の朱印「善光」、校経列位、朱印「西大寺大慈院」が描かれている（図9）。これらの挿図は静嘉堂が所蔵する「増忒阿鈴経」を描いていることに相違なく、虫損も一致している。なお、掲載された巻尾の挿図は校経列位、朱印「西大寺大慈院」を近接させて描いているが、実際には約七行分の隔たりが

あり、原品の朱印「西大寺大慈院」の上下は軸附紙として斜めに切断されている。挿図を描く際、これらの点を改変して描いたことがわかる。

なお、武四郎の「蔵品目録」には「一 増忒阿鈴経／西大寺印アリ ヱ」と記載があるが、「増忒阿鈴経」に箱書は認められない。

『撥雲余興』二集には「鞆婆沙 巻第六」も載っている。「鞆婆沙 巻第六」の挿図は巻尾のみを二図にわけ、本文最終二行の挿図（図9左図）、尾題「鞆婆沙 巻第六」および識語を描いた挿図（図10）を掲載している。この挿図も、原品と比較すれば虫損の位置が一致しており、静嘉堂本を描いていることは明らかである。

「鞆婆沙」は称徳天皇発願経の一つで、神護景雲二年（七六八）五月十三日付の願文が記されることから「神護景雲経」とも呼ばれる。先に引用した雪柯の日記（明治十二年十月十七日条）には「神護景雲古経」を武四郎が入手したことが記録され、この時期が「鞆婆沙 巻第六」の入手時期の可能性もある。

「蔵品目録」には「一 鞆婆沙経 ヱ／神護慶雲奥書付」とあり、本経巻末に書かれた識語を特記している。また当経の箱には、蓋表に明治十四年、巖谷一六によって記された墨書「鞆婆沙経 神護景雲奥書／明治辛巳歲抄巖谷脩題」があり、蓋裏には、明治十三年（一八八〇）に來日した清末の学者で書家であった楊守敬（一八三九―一九一五）による墨書「余見古写仏經多矣無如 北海翁所藏此／鞆婆沙之精者屢欲求索而北海不許／記之以見余於此經不能忘情云 楊守敬」が認められる。楊守敬は日下部、巖谷、武四郎らと交流を持ち、「北海翁所藏」の当経を見た感動を素直に箱書に記している。

―紅紙阿弥陀経―

表1の通り、他にも武四郎旧蔵の古写経は確認できるが、それらを丁寧に報告することは紙数に限りもあり、割愛したい。ただ最後に、朝鮮半島で製作された高麗写経について述べておきたい。

武四郎の著作に『新獲小集』という展覧会目録がある（註9）。明治十一年十月頃に開催された古物展の目録で、武四郎の知人友人等の収集品等を収録し、同年に刊行された目録である。このなかに「鎌足公紅紙金字阿弥陀経

大養寺」という一文をみつけることができる。この記述に該当すると思われる写経が静嘉堂古写経群に含まれている。

静嘉堂に「紅紙阿弥陀經」(図11)という朝鮮半島で製作されたと思われる写経が所蔵されている。うすい紅色に染められた本紙に、金截金で界線を施し、金泥で阿弥陀經を書写している。本紙経文の前には護法神である韋駄天を金泥で描き、天地欄には唐草文を金泥で描く。巻末には二代目畠山牛庵(一六二五〜九三)による、元禄四年(一六九二)の識語が金泥の秋草等で裝飾された料紙に墨書されている。二代目畠山は古筆了佐に古筆鑑定を学んだ人物とされ、その識語によると当経は藤原鎌足の真蹟であるという。箱に納められた附属品(紙札)には「千二百八年／阿弥陀經紅紙金泥 鎌足公」と墨書されている。当経のような藤原鎌足を伝承筆者とし、天地に金泥の裝飾を施す金字経は、明治時代から「多武峰切」と知られていた(註10)。

右のように、武四郎の『新獲小集』の記載の「鎌足公紅紙金字阿弥陀經」と静嘉堂の「紅紙阿弥陀經」は共通点が多く、『新獲小集』の記述は当経を指している可能性もあるだろう。前述の紙札裏面には「明治十一年」を意味する墨書も認められ、『新獲小集』の展覧会の時期と一致する。明治時代に当経が鑑賞されたことをうかがわせる。

ここに記載された「大養寺」であるが、現在、東京都港区虎ノ門に所在する浄土宗・西谷山大養寺と思われる。というのも、禿氏祐祥『高麗時代の写経に就て』(註11)のなかで、高麗写経の一つとして知恩院所蔵「觀無量寿經」を取り上げ、その経の巻末に養鷗徹定が記した跋語「金字古経有数種、(中略)、而書紅紙者甚罕、東京大養寺祐学和尚、藏紅紙金字阿弥陀經一卷、筆法字体、千歳以上物也」(明治十二年記)を紹介している。養鷗は「紅紙金字阿弥陀經一卷」を所蔵している大養寺が東京に所在していることを明記しており、紅紙の金字経が稀であること、大養寺の紅紙金字経が古い例であることも記している。養鷗が跋語に記した「東京大養寺」の「紅紙金字阿弥陀經一卷」は、武四郎が『新獲小集』に記した「鎌足公紅紙金字阿弥陀經 大養寺」と同じものとみなせ、この経こそ、現在、静嘉堂で所蔵している「紅紙阿弥陀經」ではないだろうか。

ただ、武四郎の「蔵品目録」に「紅紙阿弥陀經」に関する記述は見あたらず、箱蓋表には「紅紙金字阿弥陀經 多武峰旧什 一卷」と墨書されているが、その筆者はわからない。今後も「紅紙阿弥陀經」に関する資料を収集し、大養寺との関係性、伝来を探ってみたい。

おわりに

ここまで、静嘉堂古写経群の岩崎家蒐集前の伝来として、養鷗徹定の記録や松浦武四郎旧蔵の古写経等について述べた。表1に示した通り、静嘉堂古写経群のうち14件は武四郎の旧蔵または関連が推測される経典であることがわかった。そして、はからずも、これまで言及してきた資料は明治初期から明治十年代までの古写経の評価や受容を物語るものであった。

武四郎のような古器物を蒐集した人物は「好古家」と呼ばれるが、彼らが活躍した幕末から明治時代前期は、古画古器物への関心が高まった時期であった(註12)。例えば、江戸時代後期には、松平定信による『集古十種』編纂、木村兼葭堂のような収集家らによる古物図録の発行、復古やまと絵派の興隆、狩野派や谷派による古画模写、天保四年(一八三三)の正倉院開扉(明治五年にも「壬辰検査」の一環で開扉された)などをその例として挙げることができる。明治時代に入ると「美術」という言葉が創出され、廃仏毀釈と文化財保護、博覧会の開催と博物館の設置、輸出工芸品の隆盛など、現在の博物館・美術館や文化財行政の萌芽といえる事象が堰を切ったように起こった。

ただ、明治初期は西洋文化偏重の時期であり、伝統文化再評価の機運が社会に浸透したのは明治十年代のことである。先述のように、古写経が紙屑同然に扱われた時期もあり、一方で、明治四年(一八七二)には太政官から「古器旧物」保存の布告があり、保存されるべき「古器旧物」三十一の分類のなかには「古書籍並古経文ノ部」も記載されていた。

大局的にみれば、「美術」振興や文化財保護の施策は明治政府主導で行われ、当時の民間では江戸時代後期から続く好古趣味が継続していたと考えるのが妥当だろう。このような社会情勢の中で、武四郎らは独自に古写経を蒐

集し、展示鑑賞し、知識を深めていったのである。

武四郎自身と仏教の関係を考えれば、武四郎は子どもの頃から仏僧に憧れ、経を讀んじ、「お坊さんになりたい」と口癖のように言っていたという(註13)。晩年の古写経への関心や理解もこのような幼少期の記憶が背景にあったのかもしれない。

また先にも紹介した『撥雲余興』二集には、古写経の掲載意図を

其後近来は光明光皇后、小野道風等言伝への写経も唐人の筆のようになり、我が皇国には能書なきように成り行は歎かほしと思ふあまり、余が蔵するところ名たしかに知るべき物三種をのすることしかり。馬角齋の
あるじしるす

と明記している。この記述によれば、本書が刊行された明治十五年(一八八二)頃には、和製の古写経も「唐人」の書と評されるようになり、そのことを問題視し、武四郎所蔵の「永恩具経」「増壹阿鈴経」「轉婆沙」の三巻を掲載したという。武四郎は書家とも親しく交流していたこともあってか、彼が書道史研究の視点を持って、本書を編纂していたことは興味深い。

武四郎と交友のあった人物は、書家や好古家、官僚(ただし文化財保護の担当者ではない)といったさまざまな人々で、武四郎の古器物の箱書を書いた人物とも重なる。武四郎の友人・巖谷一六の日記、明治十二年十二月七日条には「午後、同松田、日下部両氏、赴松浦北海翁、謁木邨二梅氏古写経会。帰途、再過松浦氏、有晚餐之饗。於北海翁觀其所藏古物數十種、皆為妙品。長宜子孫鑑、尤珍奇。」(傍線引用者)と書かれ、巖谷、松田雪柯、日下部鳴鶴、武四郎らが木村二梅所蔵の古写経展を觀覽し、その後、武四郎が所蔵した古物も鑑賞したことを記録している(註14)。ここに書かれた木村二梅という人物は、木村市左衛門という大蔵省官僚で、号を二梅、詩や書を能くしたという(註15)。現在、静嘉堂が所蔵し、武四郎旧蔵の「大宝積経 卷第二十三」の箱書を記した人物でもある(表1-11)。

武四郎やその周辺の人物たちは、あくまでも個人的な活動として、古写経

を蒐集し、展観し、その情報を共有していたように思われる。では、彼らが培った知識・情報はその後、どのように継承され、活用されたのか、疑問が過る。はたして後の文化財保護行政に引き継がれたのだろうか。

江戸時代から続く「好古家」の文化と明治政府が推し進めた文化財保護・博物館運営の施策は、一見、二項対立のように見えるが、明治時代においては緩やかにつながっていただろう。ただ、そのつながりは一様ではなく、密接に関連する場合もあれば、さほど関係を持たなかった場合もあっただろう。このような課題を考える時、静嘉堂古写経群のようなコレクション形成(モノ)と人的ネットワーク、知識・情報共有(人・情報)を峻別して考えることも重要であろう。

江戸時代から明治時代へ、「好古家」の文化から明治政府による文化財保護行政や「美術」振興へ、モノの移動と人・情報の伝達・取捨選択の実態を精緻に見つめることで、近世と近代の間にある文化史的なあわいが具体的な実相として見えてくるかもしれない。本考が、古写経研究のみならず、その足がかりになれば幸いである。

(静嘉堂文庫美術館 学芸員)

(註1) これまでの展示歴、図録掲載歴に静嘉堂文庫「静嘉堂 日本の書跡」(一九八二年)、静嘉堂文庫美術館「仏教の美術」(一九九九年)、静嘉堂文庫「静嘉堂文庫の古典籍 第三回 日本の貴重書」(二〇〇〇年)、静嘉堂文庫美術館「入門 墨の美術 古写経・古筆・水墨画」(二〇一九年)などがある。

(註2) 石井研堂「雅俗漫録」(読売新聞一八九八年九月十二日別刷)の「四 奈良の古写経」を参照。

(註3) 増田晴美編著『百万塔陀羅尼の研究』静嘉堂文庫所蔵本を中心に(汲古書院、二〇〇七年)、『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二三・三、(公財) 静嘉堂調査報告書 静嘉堂所蔵古写経群の調査と研究』(公財) 静嘉堂、二〇二四年を参照。

(註4) 養鷗徹定「古経題跋」上下(一八六九年)参照。

(註5) 松田雪柯やその日記については、杉村邦彦「南浦贈言―松田雪柯帰郷餞別詩巻解題并訳注―」(『書論』四十四号、二〇一八年)、杉村邦彦ほか「松田雪柯東都日記」(『書論』二十九、三十、三十二、四十一号、書論研究会、一九九三、一九九八、二〇〇一、

二〇〇三、二〇〇五、二〇〇六、二〇〇八、二〇一〇、二〇一五などを参照。

- (註6) 静嘉堂が所蔵する武四郎旧蔵古器物については、内川隆志編『静嘉堂文庫蔵 松浦武四郎蒐集古物目録』(二〇一三年)、静嘉堂編『松浦武四郎コレクション』(静嘉堂、二〇一三年)を参照。

- (註7) 小杉樞郎「菅公の菅公の真蹟といふもの、論」『大八州雑誌』八十二号、一八九三年) 静嘉堂所蔵の古写経については前掲註3を参照。

- (註8) 『新獲小集』の詳細については、山本命氏より貴重な資料を提供いただいた。記して御礼申し上げる。

- (註9) 古筆了仲編『増補古筆名葉集』(明治十八年刊)には「大職冠鎌足公／多武峯切 白赤金字経金横封ノ上ニ雲竜草花アリ」と書かれている。

- (註10) 禿氏祐祥『高麗時代の写経に就て』(宝雲刊行所、一九三九年)参照。

- (註11) 「好古家」については、鈴木廣之『好古家たちの19世紀 幕末明治における《物》のアルケオロジ』(吉川弘文館、二〇〇三年)、国立歴史民俗博物館『いにしえが、好きっ！——近世好古図録の文化誌』(二〇一三年)などを参照。

- (註12) 山本命「武四郎の少年期」(『ユリイカ』八月臨時増刊号、二〇一九年)参照。

- (註13) 杉村邦彦、寺尾敏江編『巖谷一六日記』(甲賀市教育委員会、二〇一七年)参照。

- (註14) 笹木義友・三浦泰之編『松浦武四郎研究序説——幕末維新期における知識人ネットワークの諸相——』(発行・研究代表者笹木義友、二〇一一年)に紹介している「(明治十一年)三月三日付田崎早雲宛松浦武四郎書簡」に武四郎による二梅人物評が書かれている。

本考は二〇二一年度東京大学史料編纂所一般共同研究「静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化」の研究成果の一部である発表「静嘉堂所蔵古写経群の概要と調査に関する中間報告」(正倉院文書研究会第三十九回定期研究会)を一部改変し、まとめたものである。

表1 松浦武四郎旧蔵(関連)古写経一覧表 (蔵品目録) 掲載順に列記

番号	名称	頁数	「蔵品目録」記載内容	武四郎著作掲載歴	箱書	備考
1	金光明最勝王経 (讃岐切)	一卷	一 讃岐切経卷／菅公之真筆 一卷 「尚古杜多」に挿図あり	『撥雲餘興』首巻に掲載。	蓋表墨書「讃岐切 一卷」、蓋裏墨書「明治六年九月中流 大江喜暉薫手拝観并題籤」、朱文印二顆	明治六年、永井盤谷(一八二〇～八〇)の箱書
2	大般涅槃経 卷第十一	一卷	一 大般涅槃経聖行品／小野道風書 「〳」は一卷の意。以下同		蓋表墨書「大般涅槃経聖行品 小野道風書」、蓋裏墨書「明治十三年庚辰涅槃日／北海老先生属題 松田蔵」と朱文円印「元修」	明治十三年、松田雪柯(一八二三～八一)の箱書 涅槃日〳二月十五日
3	隅寺心経	一卷	一 隅寺心経 〳	『馬角斎茶会』第二席に記述あり	蓋表墨書「隅寺心経 一卷」、蓋裏墨書「癸酉秋九月万菴無観并題籤」、朱方印二顆	明治六年、市川万庵(一八三八～一九〇七)の箱書
4	隅寺心経	一卷	一 仝(隅寺心経の意) 奥書付 〳	『馬角斎茶会』第二席に記述あり	蓋表墨書「奥書／隅寺心経」、蓋裏墨書「明治十三年庚辰涅槃日／松浦北海翁属題 一六居士修薫了」、朱文方印	明治十三年、巖谷一六(一八三四～一九〇五)の箱書 涅槃日〳二月十五日
5	大般若波羅蜜多経 卷第五二六 (永恩具経)	一卷	一 大般若経卷 天平二年 〳	『撥雲余興』二集に巻頭・卷末の挿図あり	蓋表墨書「大般若波羅蜜多経卷五百二十六 天平二年写本／黄君満侶筆」、蓋裏墨書「此卷與和銅写経書体相似筆法通勁／有唐人風致焉／甲申七月大教正松翁儀」、朱文方印「松翁」	明治十七年、鵜飼徹定(一八一四～九一)の箱書
6	仏説阿弥陀経	一卷	一 仏説阿弥陀経 世尊寺行成卿筆 〳	『そめかみ』に武四郎所蔵として記載あり	蓋表墨書「仏説阿弥陀経 世尊寺行成卿筆」、蓋裏「明治庚辰春二月題匣／鳴雀仙吏日下東作」(白文方印)	明治十三年、日下部鳴鶴(一八三八～一九二二)の箱書
7	大般若波羅蜜多経 卷第四三四 (安倍小水麻呂経)	一卷	一 阿倍小水麻呂大般若／地獄品 一卷 〳		蓋表墨書「阿倍小水麻呂大般若地獄品／壬午夏五〳為／北海行者囑 穀堂墨題」、朱文方印「宣光」	明治十五年、鷺津穀堂(一八二五～八二、諱「宣光」)の箱書
8	仏説忠心経	一卷	一 仏説中心経 〳		なし	
9	華手経 卷第四(五月一日経)	一卷	一 華手経 東大寺捺印 一卷		なし	
10	轉婆抄	一卷	一 轉婆抄経 〳／神護慶雲奥書付 〳	『撥雲余興』二集に巻末・識語の挿図あり	箱書「轉婆抄経 神護景雲奥書／明治辛巳歳抄巖谷脩題」、箱蓋裏「余見古写仏経多矣無如 北海翁所蔵此／轉婆抄之精者屢欲求索而北海不許／記之以見余於此経不能忘情云 楊守敬」	明治十四年、楊守敬(一八三九～一九一五)の箱書
11	大宝積経 卷第二十三	一卷	一 大宝積経 〳		蓋表墨書「大寶積経 神護寺捺印」、蓋裏墨書「木二梅題籤」と朱文円印「二梅」	木村二梅の箱書
12	増壹阿含経 卷第二十二 (善光朱印経)	一卷	一 増壹阿含経／西大寺印アリ 〳	『撥雲余興』二集に巻頭・識語の挿図あり	なし	
13	百万塔陀羅尼		一 百万塔中所納陀羅尼経 一卷 〳	『撥雲余興』二集に挿図あり		
14	紅紙金字阿弥陀経	一卷	(記載なし)	『新獲小集』(明治十一年刊行)に記述あり	蓋表墨書「紅紙金字阿弥陀経 多武峰旧什 一卷」	明治十一年の紙札あり



図1 勾玉(松浦武四郎旧蔵)

心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至无老死亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜多呪即說呪曰

揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶

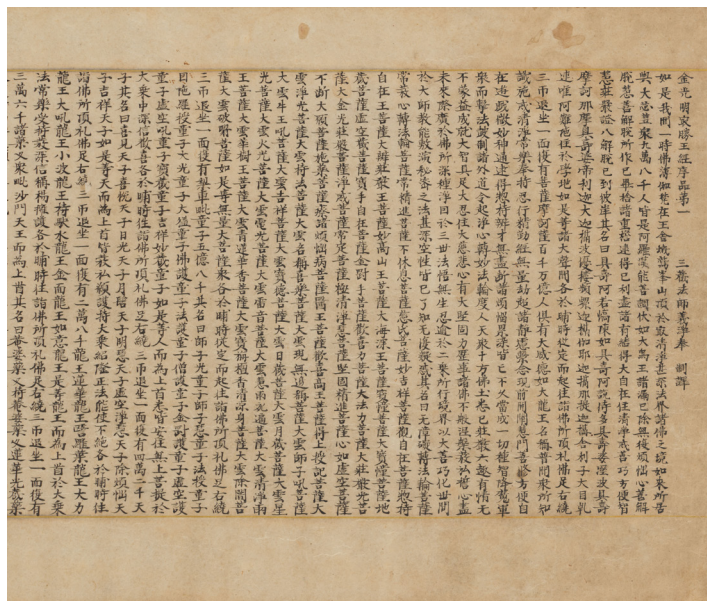
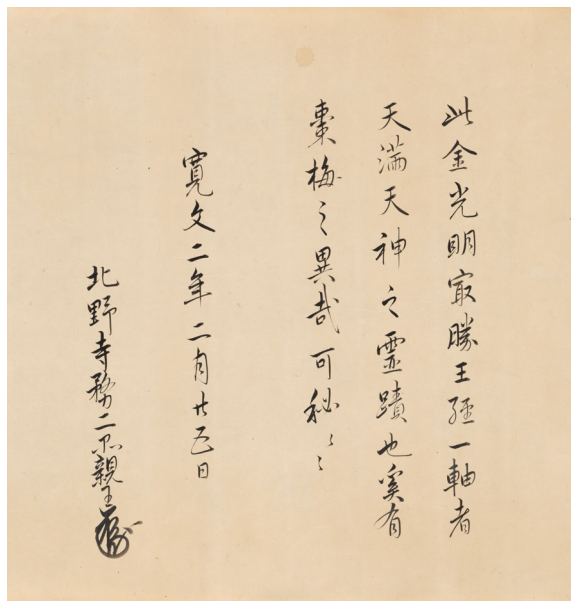
圖 2-1 心經(隅寺心經)

心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中无色无受想行识无眼界乃至无意识界无无明亦无无明尽乃至无老死亦无老死尽无苦集灭道无智亦无得以无所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无罣礙无罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神呪是大明呪是无上呪是无等等呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜多呪即說呪曰

揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶
誦此經破十惡五逆九十五種邪道若欲供養十方諸佛報十方諸佛恩當誦觀世音般若百遍千遍无問晝夜常誦此經

圖 2-2 心經(隅寺心經)



(識語) (巻首)

図3 金光明最勝王經(讃岐切)

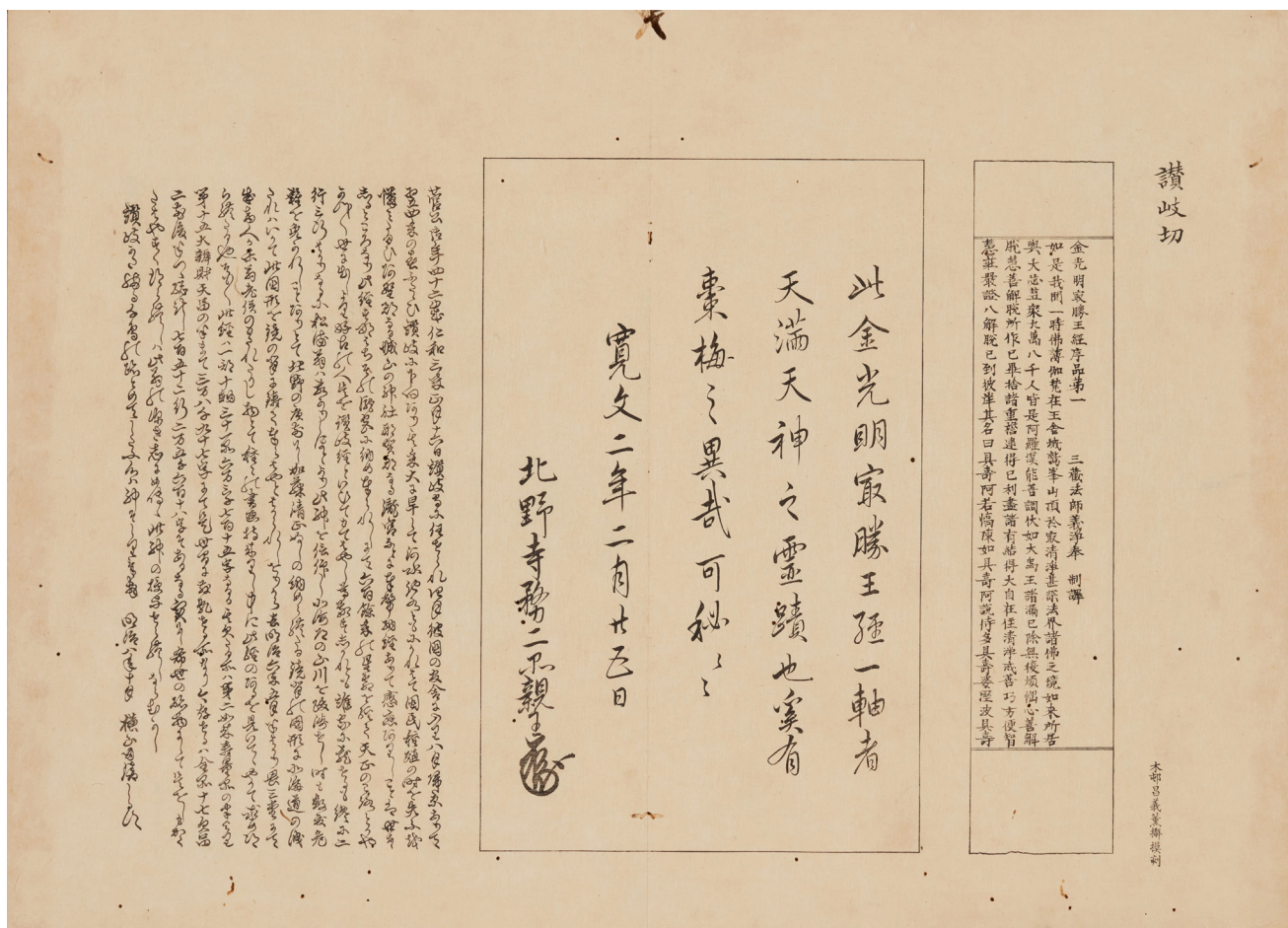


図4 『撥雲余興』首巻 「讃岐切」挿図

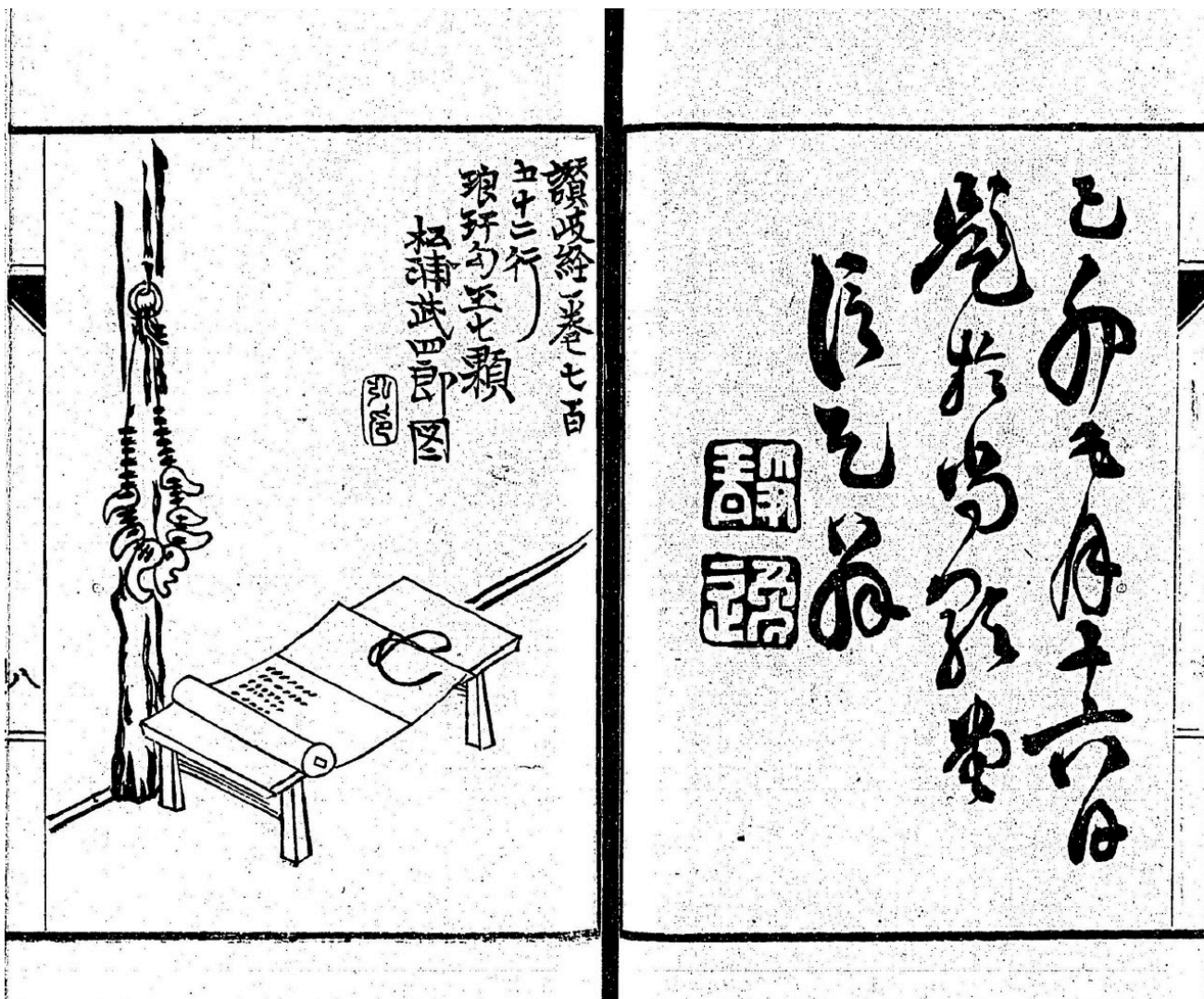
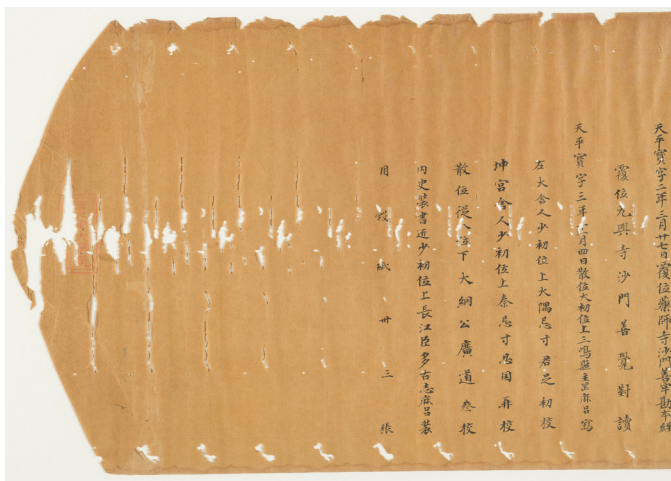
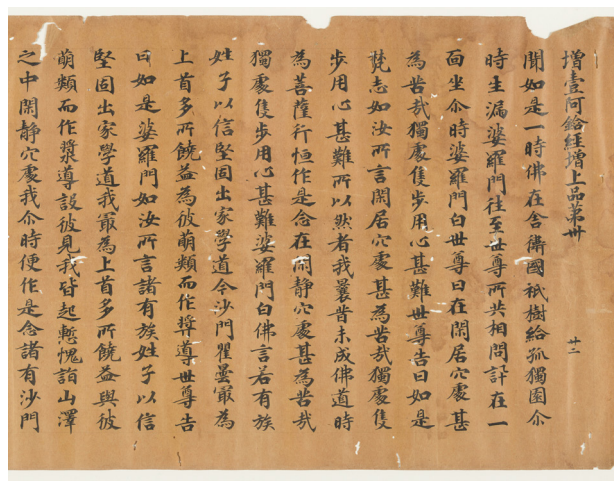


図5 『尚古杜多』挿図(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)

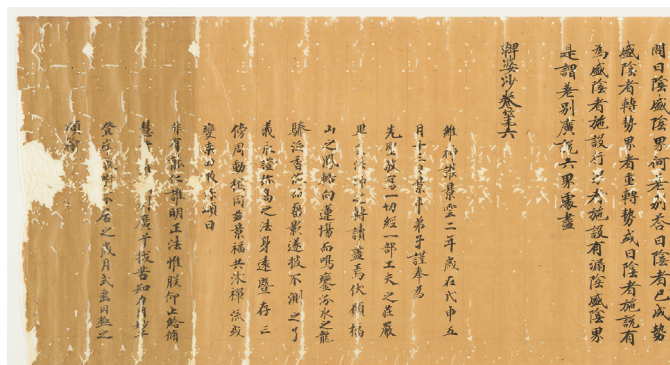


(巻尾)



(巻首)

図6 增壹阿鋡經 巻第22



(卷尾)



(卷首)

図7 轉婆沙 卷第6



図8 『撥雲余興』二集「永恩具經」挿図

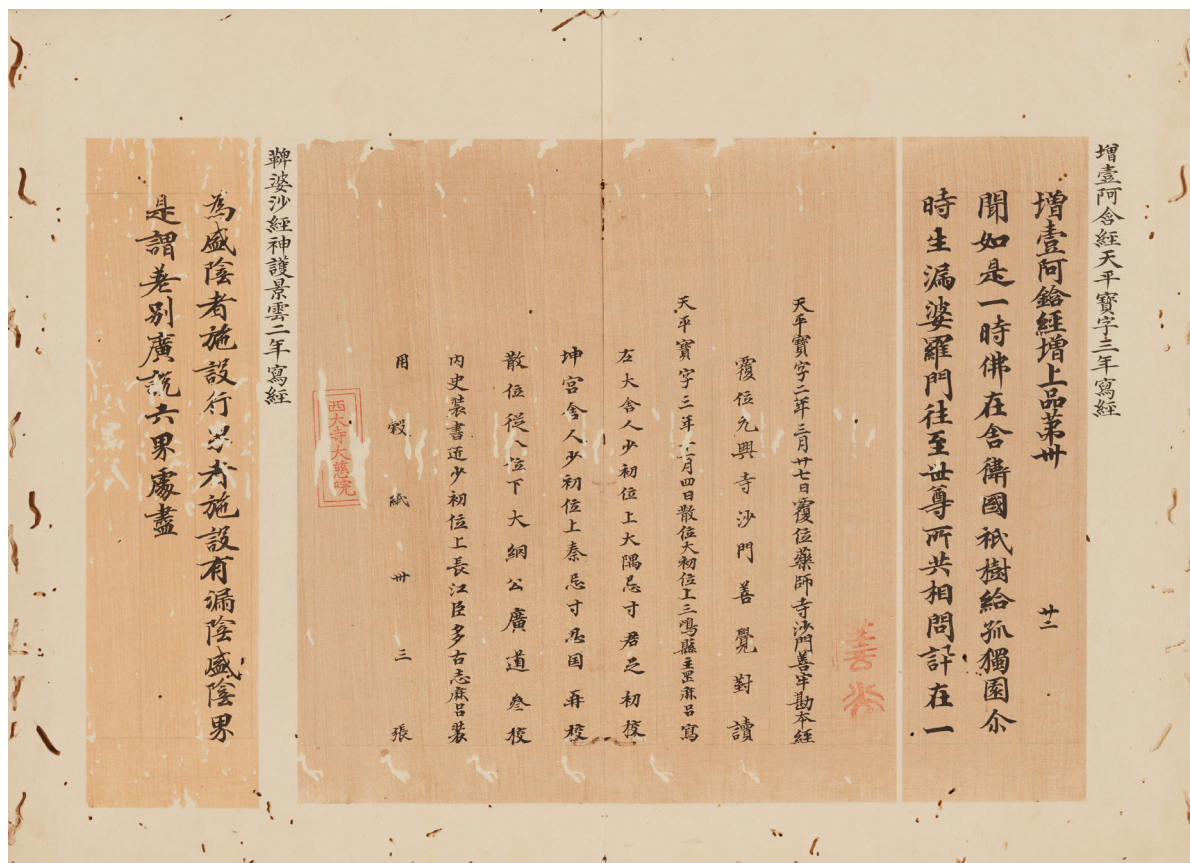


圖9 『撥雲余興』二集 「增壹阿含經」『轉婆沙 卷第6』 挿図

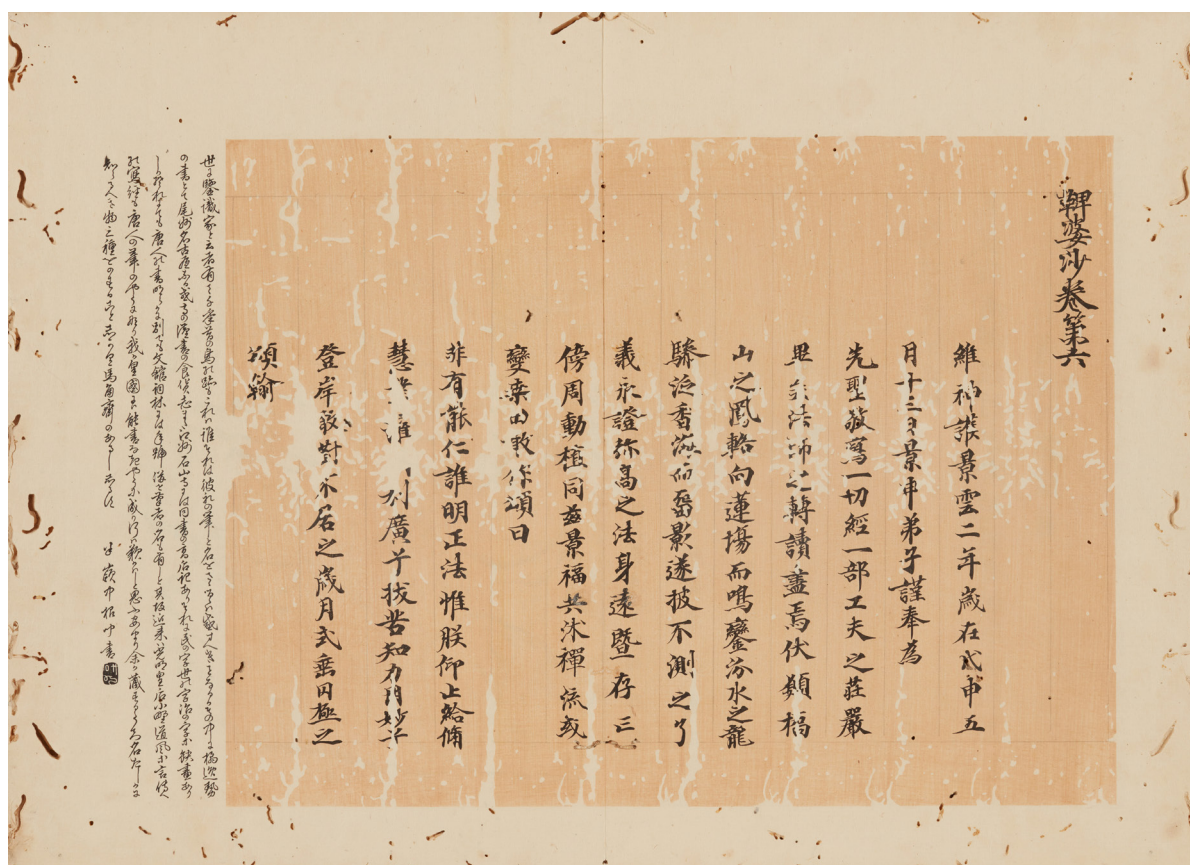


図10 『撥雲余興』二集「轉婆沙 卷第6」 挿図

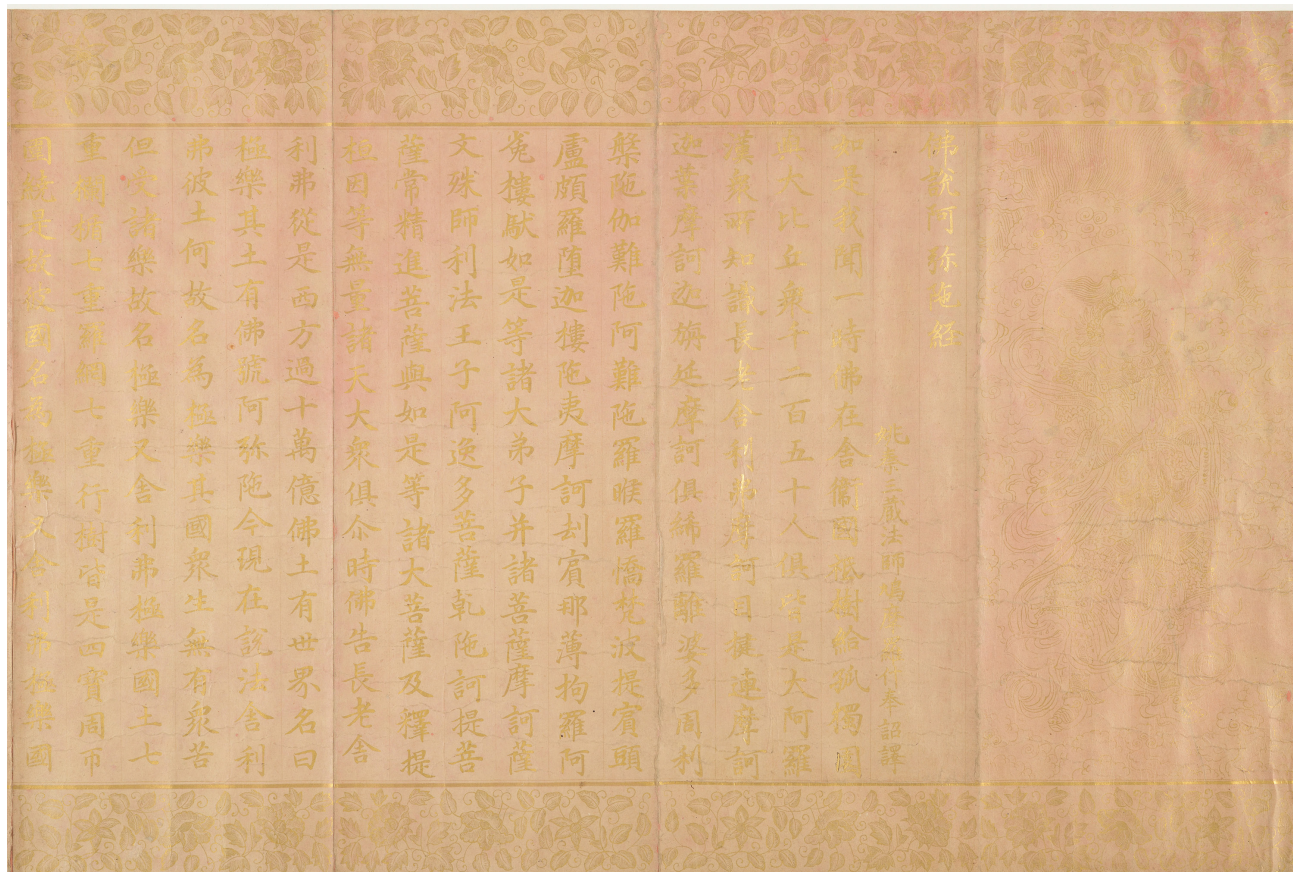


図11 紅紙阿彌陀經